

# グラフで見る景気概況

## 【日本経済の景気概況】

景気の回復が続いている。2004年1~3月期の実質GDP成長率は、前期比+1.4%（年率+5.6%）となった。個人消費が同+1.0%と堅調に推移したほか、設備投資が同+2.4%と増加を続けた。外需寄与度も同+0.3%とプラス寄与を続けた。

4月の鉱工業指数によると、生産は前月比+3.3%、出荷は同+3.9%と、ともに増加した。生産の予測指数は5月同+3.5%、6月同-1.5%となり、生産は高水準で推移する見込みである。一方、在庫は3ヶ月連続で増加した。

2004年1~3月期の機械受注（船舶・電力を除く民需）は、高い伸びを示した2003年10~12月期の反動もあって、前期比-5.6%と2四半期ぶりの減少となった。4~6月期の内閣府見通しは、同-3.2%と2四半期連続の減少が見込まれている。

個人消費は増加傾向が続いている。4月の実質消費支出（勤労者世帯）は前年比+7.2%と大きく伸びた。所得は世帯主・配偶者ともに伸び、可処分所得は同+3.3%となった。所得環境の持ち直しが続いており、消費は当面回復傾向が見込まれる。

4月の輸出金額は前年比+10.8%と、2桁の伸びが4ヶ月連続で続いている。地域別では、アジア向けが全体を牽引したほか、EU向けも増加傾向を続けている。東欧・ロシア・中東向け輸出も拡大しており、輸出先に広がりが出ている。

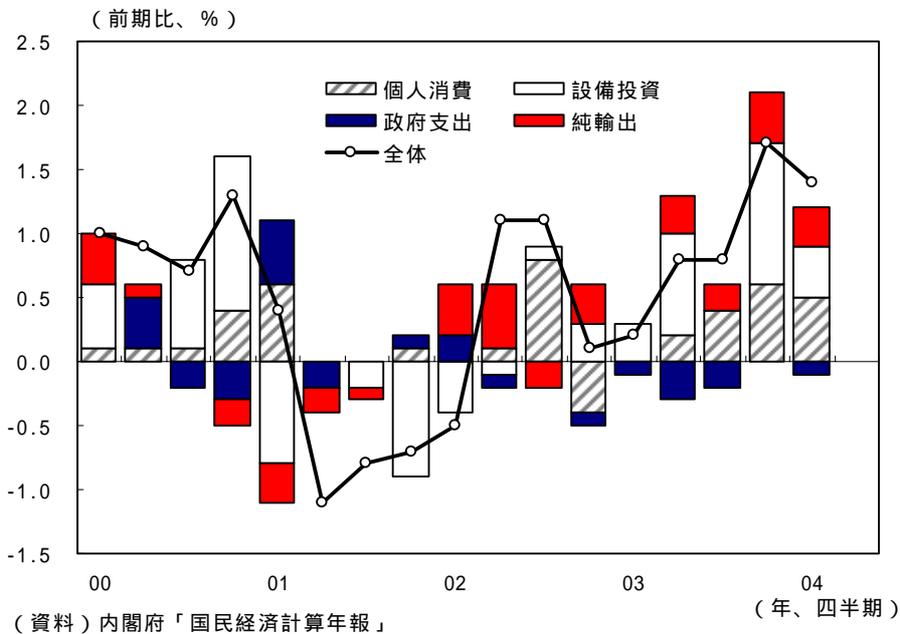
4月の国内企業物価は前年比+0.5%と、上昇幅が拡大した。原材料高を背景に素材が上昇を続けているほか、需要増加を背景に電気機器も下落幅が縮小している。ただ、足元では原油を除いた国際商品市況は下落に転じており、今後、川上段階からのインフレ圧力が一服する可能性がある。



# 日本の景気概況

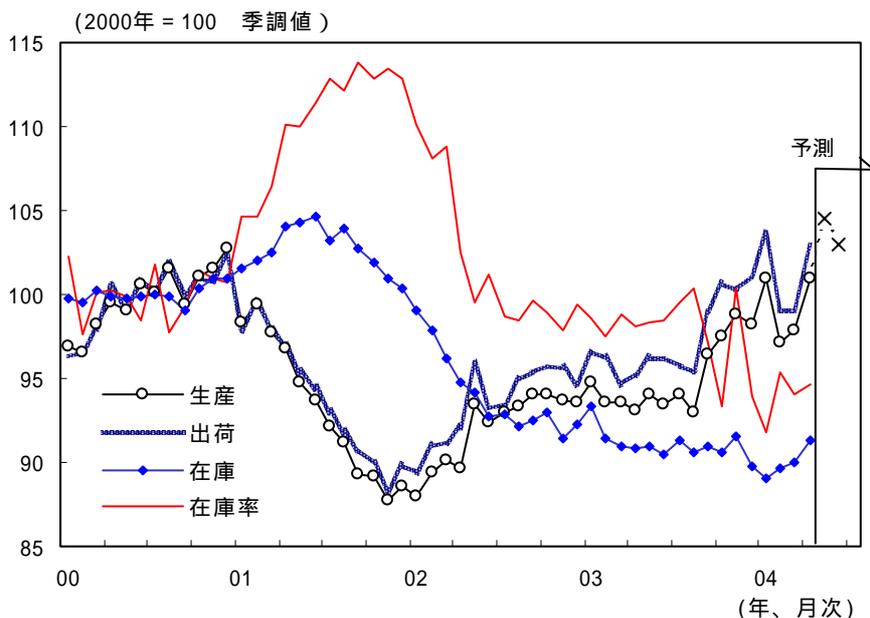
## 1. GDP

～ 2004年1～3月期の実質GDP成長率は、前期比+1.4%（年率+5.6%）となった。個人消費は同+1.0%と堅調に推移したほか、設備投資も7期連続で増加しており、内需寄与度は同+1.1%となった。アジア向けを中心に輸出拡大が続き、外需寄与度も同+0.3%と6期連続のプラス寄与となった。



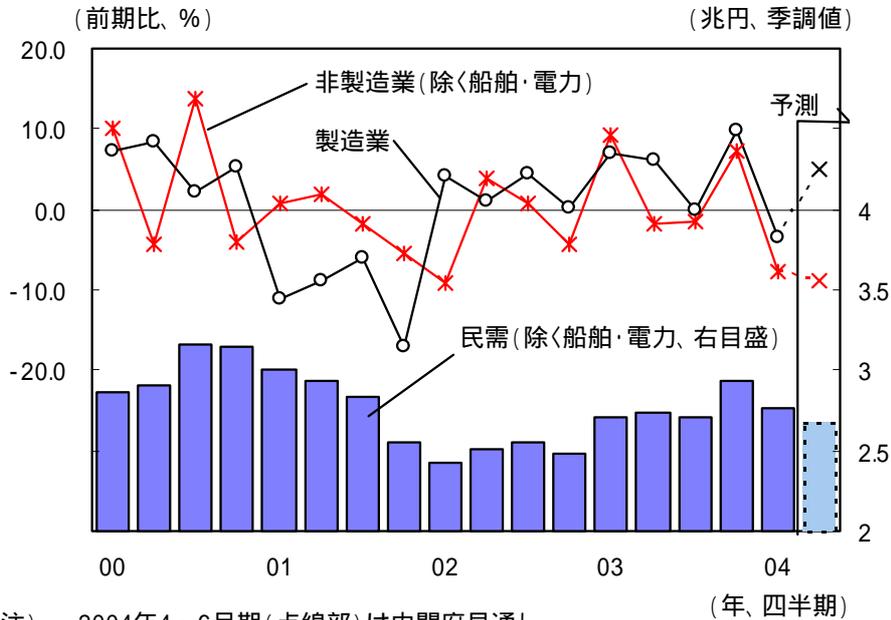
## 2. 生産

～ 4月の鉱工業指数によると、生産は前月比+3.3%、出荷は同+3.9%と、ともに増加した。生産の予測指数は5月同+3.5%、6月同-1.5%となり、生産は高水準で推移する見込みである。一方、在庫は3ヶ月連続で増加した。



### 3. 設備投資

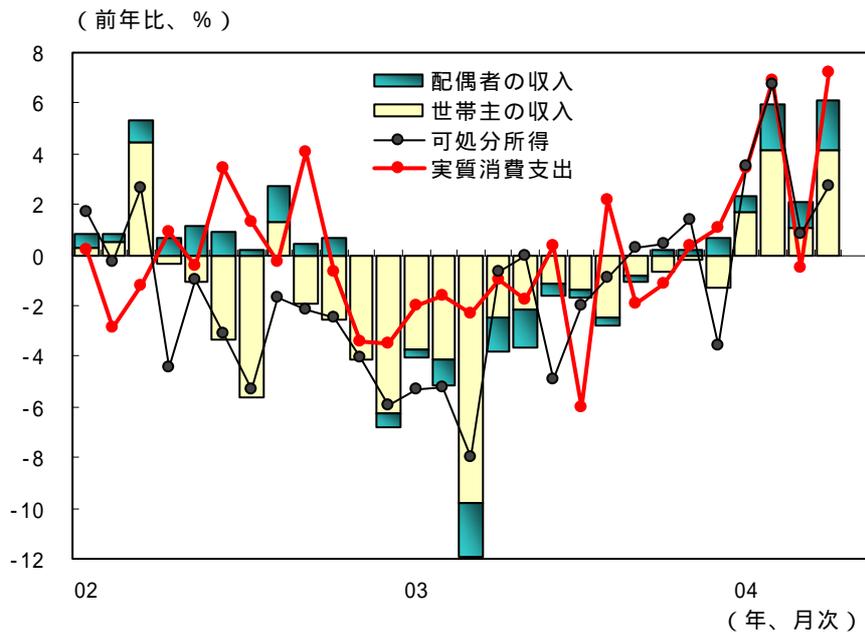
～ 2004年1～3月期の機械受注（船舶・電力を除く民需）は、高い伸びを示した2003年10～12月期の反動もあって、前期比 - 5.6%と2四半期ぶりの減少となった。4～6月期の内閣府見通しは、同 - 3.2%と2四半期連続の減少が見込まれている。



(注) 2004年4～6月期(点線部)は内閣府見通し。  
 (資料) 内閣府「機械受注統計」

### 4. 個人消費

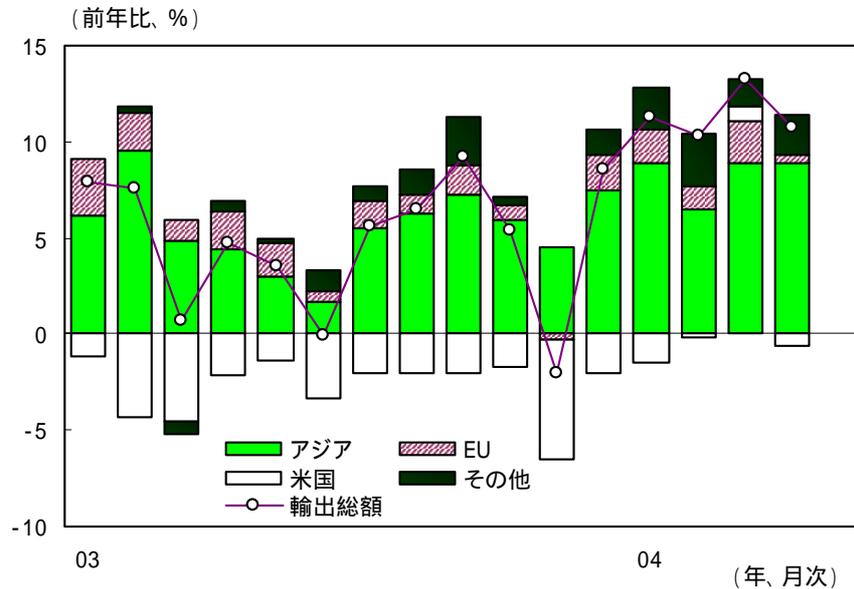
～ 4月の実質消費支出（勤労者世帯）は、前年比+7.2%と大きく伸びた。内訳をみると、教育関係費、自動車・家電などの耐久消費財、レジャー関連の支出が増えた。所得は、世帯主、配偶者ともに増加し、可処分所得は同+3.3%となった。所得環境の持ち直しが続いており、消費は当面回復傾向が見込まれる。



(資料) 総務省「家計調査報告」

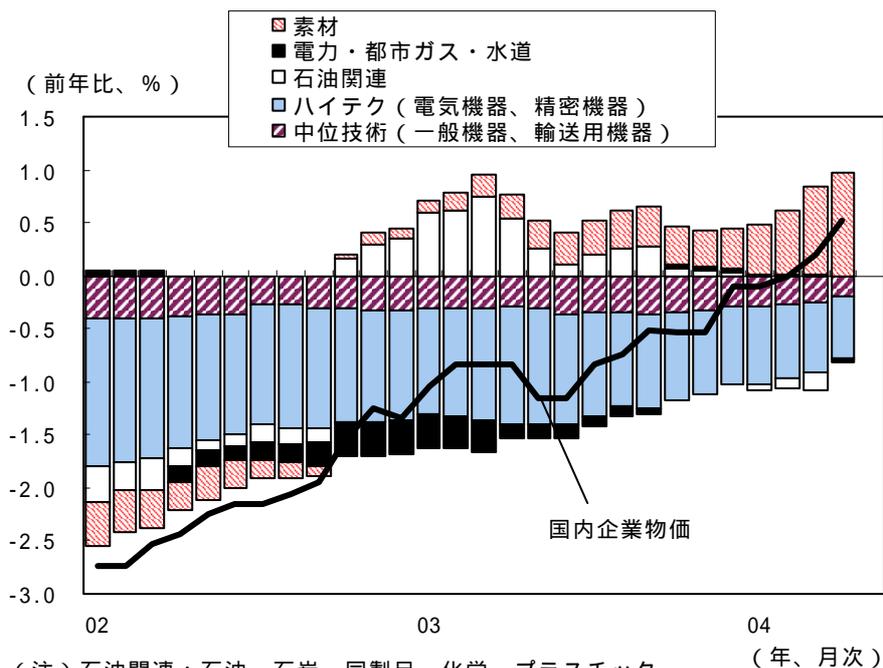
## 5. 外需

～ 4月の輸出金額は前年比+10.8%と、2桁の伸びが4ヶ月連続で続いた。地域別では、アジア向けが全体を牽引したほか、EU向けも増加傾向を続けている。東欧・ロシア・中東向け輸出も拡大しており、輸出先に広がりが出ている。



## 6. 国内企業物価

～ 4月の国内企業物価は前年比+0.5%と、上昇幅が拡大した。原材料高を背景に素材が上昇を続けているほか、需要増加を背景に電気機器の下落幅が縮小している。ただ、足元では原油を除いた国際商品市況は下落に転じており、今後、川上段階からのインフレ圧力が一服する可能性がある。



## 金利・為替動向

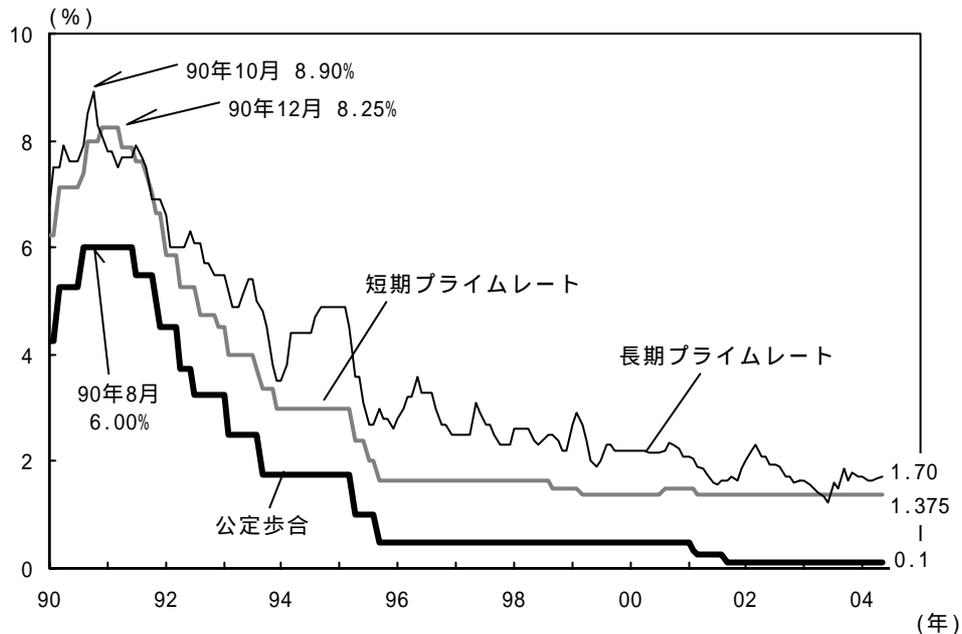
(注)足元の数値は、2004年6月1日時点

長・短期プライムレート、公定歩合は月末値、それ以外は月中平均の数値を使用して作成。

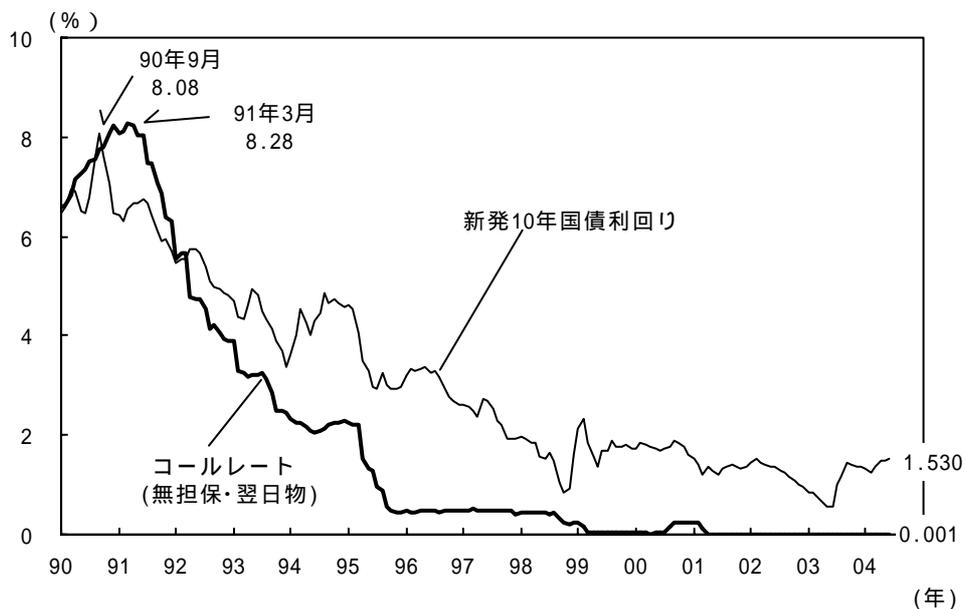
短期プライムレートは、都市銀行が自主的に決定した金利のうち、最も多くの銀行が採用した金利。

### 国内金利

～ 日銀は、5月20日の金融政策決定会合で当座預金残高の目標を「30～35兆円程度」に据え置いた。足元の当座預金残高は32兆円前後で推移している。

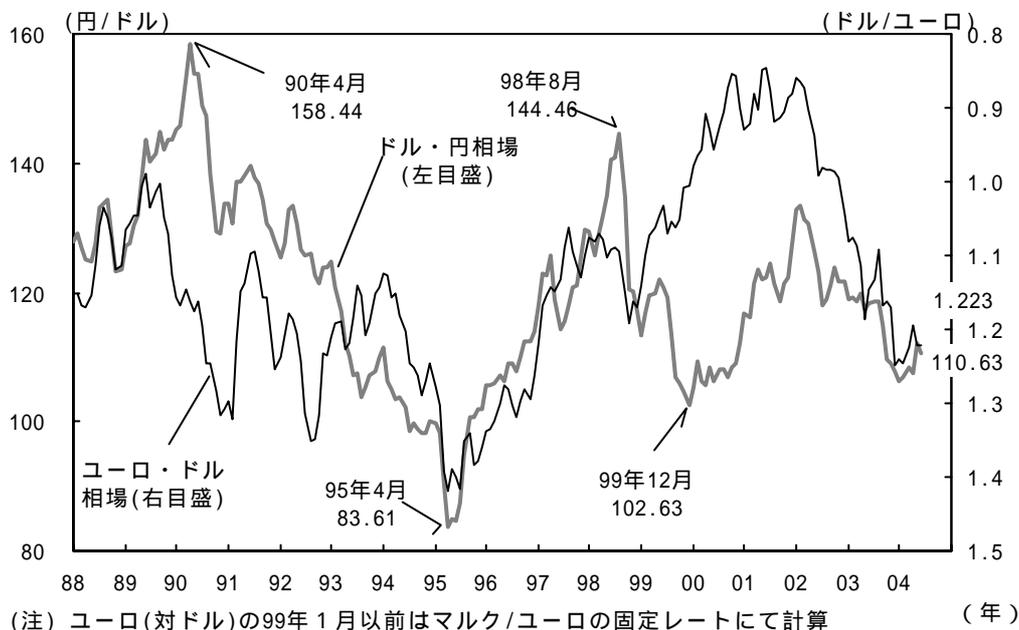


～ 無担保コール翌日物金利は、日銀の潤沢な資金供給を背景に低位で安定している。米国の早期利上げ観測の高まりや原油価格の高騰などがあつたものの、国内の金融政策に大きな変更はないとの見通しから、長期金利（新発10年債利回り）は、1.5%前後で安定して推移した。



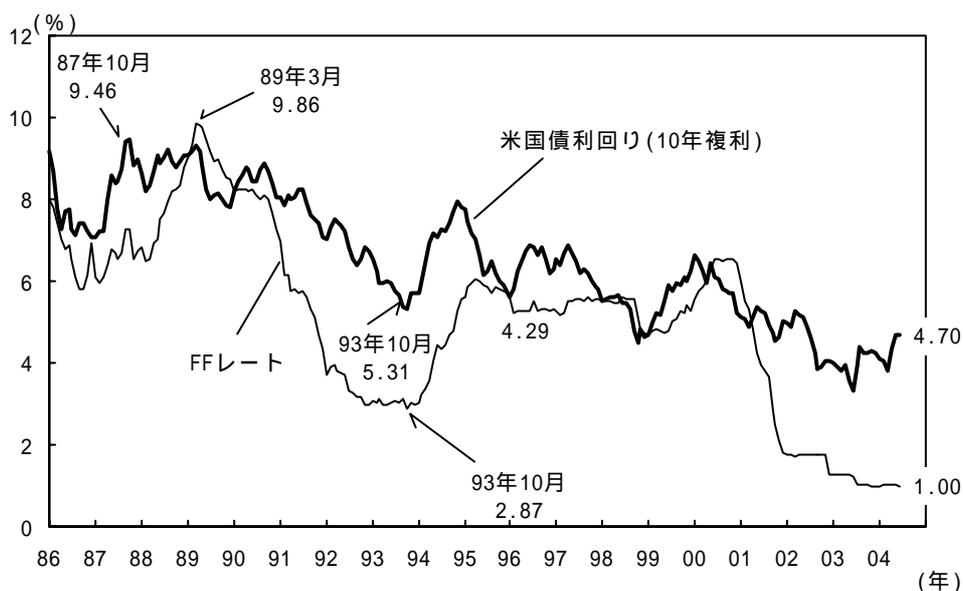
## 為替相場

- ドル・円レートは、米国の早期利上げ観測が高まったことなどを背景に、一時115円近辺まで円安が進んだ。足元では中東情勢の悪化や原油価格高騰を材料にドルが売られ、110円前後まで戻している。なお、本邦当局による為替介入は、5月も実施されなかった模様である。



## 米国金利

- 5月7日に発表された米国雇用統計で雇用環境の改善が確認されたことから、早期利上げ観測が台頭し、長期金利は一時4.8%台まで上昇した。その後、不安定な中東情勢や原油価格の高騰などを背景に、月末にかけて4.6%台に低下した。



本レポートに掲載された意見・予測等は資料作成時点の判断であり、今後予告なしに変更されることがあります。